

北星学園大学における非対面授業の実態

—2020年度前期末調査からの報告—

永 井 暁 行
金 子 大 輔

北星学園大学における非対面授業の実態 ——2020年度前期末調査からの報告——

永井 暁行 金子 大輔
Akiyuki NAGAI Daisuke KANEKO

目次

1. はじめに
2. 方法
3. 学生一斉調査の結果と考察
4. 教員一斉調査の結果と考察
5. まとめ

[Abstract]

The Online Classes at Hokusei Gakuen University:2020 Academic Year, First Semester

In the first semester of the 2020 academic year, Hokusei Gakuen University was affected by COVID-19 and was forced to switch to online classes. At the same time, a survey was administered to students and faculty to assess the COVID-19 situation and the need to deliver online classes at the university. The study recruited 1,475 students and 155 faculty members and developed focused surveys for each group. The items for the students were focused on online classes, homework, and support, and those for the faculty members were focused on online classes and student activities. These aspects were compared with regular face-to-face classes. It was found that the students were experiencing difficulties in learning and interacting with teachers and other students. The authors discuss the efforts and limitations for both groups in adapting to the nonface-to-face teaching under the current pandemic conditions.

1. はじめに

2020年度の前期は新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19とする)の影響を受け、多くの大学で非対面による授業を実施せざるを得なかった。北星学園大学・北星学園大学短期大学部(以下、北星学園大学とする)においても、2020年度前期は全面的に非対面授業が採用された。北星学園大学では、非対面授業にあたって学習管理システム(learning management system; 以下LMSとする)やウェブ会議システムZoomが活用された。教

員・学生はこれらのシステムを活用して非対面で教育・学習に取り組むこととなった。北星学園大学のCOVID-19への対応については金子・永井(2020)に詳述されている。

金子・永井(2020)にも述べられているように、北星学園大学は在学生全員に対して、「自宅・自室での学習環境に関する緊急調査」を行い、非対面授業に対する準備状況を調査した。この調査は4月13日から行われ、1週間後の4月19日までに大学・短期大学部を合わせて3,012名(回収率70.94%)の学生から協力を得た。この調査の結果は、金子・永井

キーワード：COVID-19, 非対面授業, 大学教育
Key words：COVID-19, online classes, academic education

(2020)において報告されているほか、永井・金子(2020)においても非対面授業について不安なこと、困っていること、期待していることに関する自由記述の項目について分析されている。これらの調査は北星学園大学における非対面授業の実態を示す資料として有意義なものであった。

昨今はCOVID-19や非対面授業の実施による学生への影響や、学生の状態について様々な調査や報告がなされている。たとえば、日常生活における不安、学生の経済状況、非対面授業に対する負担感など(藤本他, 2020; 飯田他, 2020)、多岐に亘って検証が進められている。本邦における多くの大学・教職員にとって、また学生にとって、非対面授業を中心に教育・学習を続けることは過去に例をみないことである。そのような状況にある大学・学生の状況を記録し、知見を蓄積する意義は大きい。前述した永井・金子(2020)や藤本他(2020)は学生の抱える不安や、おかれた状況等を分析したものの、これは2020年度前期が始まる4月時点での調査であった。大学・学生の状況を検討するためには、実際の非対面授業が行われた後の学生の様子を知る必要がある。また、特に対面授業時との比較を試みる場合には、学生への調査だけでなく教員への調査も有効であろう。多くの学生は対面と非対面で同じ授業を受けているわけではない。1年生はもちろんのこと、2年生以上も進級に伴い昨年度とは異なる授業を受けている。ある程度安定して対面と非対面の違いを検討するためには教員から得た知見も必要になる。

そこで本稿では、北星学園大学が2020年度前期末に実施した学生・教員へのアンケートの主な結果を報告する。2021年度以降も少なからずCOVID-19の影響を受けるであろう高等教育現場に向けて、2020年度前期の実態からの示唆を得る一助となることを目指す。

2. 方法

2-1. 学生を対象とした調査

(1) 調査方法および回答者(学生)の数

学生への調査は2020年8月14日から8月24日の期間に、北星学園大学・北星学園大学短期大学部に所属する全学生を対象に実施された。調査への回答はオンラインで行われ、回答のためのURLは各学生のメールアドレス宛に送信された。

調査協力者数は大学生および短大生を合わせて1,474名(回答率34.72%)であった。学年の内訳は、1年生422名、2年生407名、3年生347名、4年生281名、5年生以上17名であった。

(2) 主な調査内容(学生)

学生への調査では、本学の学生であることの確認のために、Eメールアドレスと氏名の入力を求めた。所属学科、学年、年齢、性別、居住形態の他、主な調査項目として以下の項目について質問した(表2-1)。

授業について、履修科目の数、授業への積極性、負担感、授業の受講場所、受講時の不都合、授業への不安を質問した。このうち、履修科目の数は記述式、授業への積極性、負担感は7段階での評価、授業の受講場所、受講時の不都合、授業への不安は多肢選択によって構成した。多肢選択の選択肢は結果と共に示す。

課題について、平均時間、負担感を質問した。平均時間と負担感のいずれも7段階での評価によって構成した。平均時間は「1. 10分未満」、「2. 30分未満」、「3. 1時間未満」から1時間ごとに選択肢を作成し、「7. 4時間以上」の7段階とした。

支援・相談等について、非対面授業で困った時に相談する相手、学内の友人数、相談できる教職員数、大学からのメール数を質問した。困った時に相談する相手については多肢

選択、学内の友人数、相談できる教職員数、大学からのメール数は記述式によって構成した。

その他、非対面授業の活用事例や、求めている支援などの自由記述による項目なども質問に含まれていたが、紙幅の都合上、本稿では取り上げなかった。

2-2. 教員を対象とした調査

(1) 調査方法および回答者（教員）の数

教員への調査は2020年8月14日から8月24日の期間に、北星学園大学・北星学園大学短期大学部で授業を担当した専任・非常勤の教員を対象に実施された。調査への回答はオンラインで行われ、回答のためのURLは各教員のメールアドレス宛に送信された。

調査協力者数は155名（回答率37.35%）であった。回答者における専任・非常勤の内訳は、専任教員58名、非常勤講師97名であった。

表2-1 学生一斉調査の主な項目

項目	回答形式	選択肢例
授業について		
履修科目の数	記述式	
授業への積極性	7件法	「1. 全く積極的でなかった」～「7. とても積極的であった」
授業への負担感	7件法	「1. 全く負担を感じなかった」～「7. とても負担を感じた」
非対面授業の受講場所	多肢選択 (複数回答可)	「1. 自宅（家族・親族の家含む）の1人で受講できる部屋」、 「2. 自宅（家族・親族の家含む）だが、周りに家族等がいる部屋」等、「その他（自由記述）」含む12種
非対面授業受講時の不都合・問題	多肢選択 (複数回答可)	「1. インターネット環境が悪い」、 「2. 自身が占有できるパソコンがない」等、「その他（自由記述）」含む6種
非対面授業への不安・問題	多肢選択 (複数回答可)	「1. 課題の量が多い」、 「2. 課題が難しい」等、「その他（自由記述）」含む16種
課題について		
1科目あたりの課題にかける平均的な時間	7件法	「1. 10分未満」、 「2. 10分以上30分未満」、 「3. 30分以上1時間未満」、 「4. 1時間以上2時間未満」、 「5. 2時間以上3時間未満」、 「6. 3時間以上4時間未満」、 「7. 4時間以上」
課題への負担感	7件法	「1. 全く負担を感じなかった」～「7. とても負担を感じた」
支援・相談について		
非対面授業で困った時に相談する相手	多肢選択 (複数回答可)	「1. 教員」、 「2. 遠隔授業サポートチーム」等、「その他（自由記述）」含む8種
学内の友人数	記述式	
相談できる教職員数	記述式	
1日あたりの大学から送られるメール数	記述式	

表2-2 教員一斉調査の主な項目

項目	回答形式	選択肢例
授業について		
対面授業と比べた授業準備にかかる時間	7件法	「1. 著しく減った」～「7. 著しく増えた」
今後も非対面授業を継続したいか	7件法	「1. 全く思わない」～「7. とても思う」
今後もLMSを活用したいか	7件法	「1. 全く思わない」～「7. とても思う」
時間外学習の指示における目安時間	7件法	「1. 10分未満」、 「2. 10分以上30分未満」、 「3. 30分以上1時間未満」、 「4. 1時間以上2時間未満」、 「5. 2時間以上3時間未満」、 「6. 3時間以上4時間未満」、 「7. 4時間以上」
学生の様子について		
対面授業と比べた学生の質問等の量	7件法	「1. 著しく減った」～「7. 著しく増えた」
対面授業と比べた学生の質問等に対応する時間	7件法	「1. 著しく減った」～「7. 著しく増えた」
対面授業と比べた学生とのコミュニケーションの時間	7件法	「1. 著しく減った」～「7. 著しく増えた」
対面授業と比べた学生の授業理解	7件法	「1. 著しく理解が困難になった」～「7. 著しく理解が促された」
対面授業と比べた学生の課題提出状況	7件法	「1. 対面よりも提出状況が悪い」～「7. 対面よりも提出状況が良い」
学生の受講態度等	多肢選択 (複数回答可)	「1. 対面に比べて受講態度が良くなった」、 「2. 対面に比べて受講態度が悪くなった」等、「その他（自由記述）」を含む8種
学生からの質問等の種類	多肢選択 (複数回答可)	「1.1 授業内容に関するもの」、 「2. ZoomやMoodleなどのシステムに関するもの」等、「その他（自由記述）」を含む5種

(2) 主な調査内容 (教員)

教員への調査では、本学の教員であることの確認のために、Eメールアドレスと氏名の入力を求めた。専任／非常勤の別、所属部門、年齢、性別、北星学園大学で担当した科目数の他、主な調査項目として以下の項目について質問した(表2-2)。

授業について、対面授業と比べた授業準備の時間、今後も非対面授業を続けたいか、今後もLMSを活用したいか、時間外学習の想定時間を質問した。いずれも7段階の評定を求めた。今後も非対面授業を続けたいか、今後もLMSを活用したいかの3項目に対しては、1をより否定的な回答、7をより肯定的な回答に設定した。対面授業と比べた授業準備の時間については、「1. 著しく減った」から「7. 著しく増えた」の7段階とした。時間外学習の想定時間については、「1. 10分未満」、「2. 30分未満」、「3. 1時間未満」から1時間ごとに選択肢を作成し、「7. 4時間以上」の7段階とした。

学生の様子について、対面授業と比べた学生の質問等の量、対面授業と比べた学生の質問等に対応する時間、対面授業と比べた学生とのコミュニケーションの時間、対面授業と比べた学生の授業理解、対面授業と比べた学生の課題提出状況、学生の受講態度等、学生からの質問等の種類を質問した。対面授業と比べた学生の質問等に対応する時間、対面授業と比べた学生とのコミュニケーションの時間、対面授業と比べた学生の授業理解、対面授業と比べた学生の課題提出状況、対面授業と比べた学生の質問等の量については7段階

の評定を求めた。対面授業と比べた学生の質問等の量、対面授業と比べた学生の質問等に対応する時間、対面授業と比べた学生とのコミュニケーションの時間、は対面と比べた時に、「1. 著しく減った」から「7. 著しく増えた」の7段階とした。対面授業と比べた学生の授業理解は「1. 著しく理解が困難になった」から「7. 著しく理解が促された」、対面授業と比べた学生の課題提出状況については「1. 対面授業よりも提出状況は悪い」から「7. 対面よりも提出状況が良い」の7段階とした。学生の受講態度等、学生からの質問等の種類については、多肢選択によって構成した。多肢選択の選択肢は結果と共に示す。

その他、非対面授業の活用事例や、授業・成績評価における工夫、必要な支援などの自由記述による項目なども質問に含まれていたが、紙幅の都合上、本稿では取り上げなかった。

3. 学生一斉調査の結果と考察

以下に学生調査の結果を示した。学生への調査の結果については大学／短大と学年を別にして記述した。

3-1. 授業について

まず、履修科目の数、授業への積極性、授業の負担感について、平均値と標準偏差を示した(表3-1)。学年による違いを見ると、大学3年生以上になると履修科目数が少なくなることがわかる。履修科目が少なくなれば、その分授業への負担感は低くなり、各授業への積極性も影響を受ける可能性がある。そこ

表3-1 授業についての項目の平均値および標準偏差

	大学					短期大学部	
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生以上	1年生	2年生
履修科目数	13.40 (6.48)	13.40 (6.15)	10.90 (5.02)	4.99 (3.78)	6.59 (3.48)	15.20 (6.62)	12.10 (4.33)
授業への積極性	5.33 (1.34)	5.27 (1.46)	5.35 (1.38)	5.36 (1.60)	5.76 (0.75)	5.45 (1.33)	5.64 (1.41)
授業への負担感	4.58 (1.48)	4.27 (1.68)	4.28 (1.69)	3.28 (1.67)	3.29 (1.79)	3.99 (1.68)	4.23 (1.81)

注) 値は平均値, () 内は標準偏差

で、授業への積極性、授業の負担感に対して、履修科目の数を共変量とした共分散分析を行い学年の効果を分析した。その結果、授業への積極性については学年の効果は見られなかった ($F(6, 1466) = 0.93, n.s., \eta^2 = .00$) が、授業の負担感については学年の効果が見られた ($F(6, 1466) = 10.59, p < .001, \eta^2 = .04$)。Tukey の多重比較を行った結果、大学1～3年生、短大2年生は大学4年生に比べて負担を強く感じていることが明らかになった ($p < .05$)。また、大学1年生は短大1年生に比べて負担を強く感じていることが明らかになった ($p < .05$)。履修科目数が多いほど、授業への負担が増えることは想像に難くないが、履修科目数を統制しても学年の差がみられた。多くの4年生は就職活動などを通し、卒業後へのキャリアに備える。そのため、1～3年生に比較して相対的に授業に対する負担を少ないものと感じている可能性がある。本調査の結果が COVID-19 や非対面授業によ

る影響かどうかを検討するためには、通常の対面授業時の学年間の差と合わせて分析していく必要がある。

次に、授業の受講場所、受講時の不都合、授業への不安について、それぞれの項目の回答数および回答率を表3-2、表3-3、表3-4にまとめた。表3-2に示したように、学生の受講環境を見るとほとんどの学生が自宅を授業の受講場所としている。ただし、必ずしも1人で受講できる環境を整えられているとは限らない。周りに家族等がいる部屋で受けなければならない学生もおり、そのような学生が集中して学習できるような環境を整えていく必要がある。金子・永井 (2020) にあるように北星学園大学は一部パソコンの使える教室 (情報実習室) を開放していたが、この利用者数は多くなかった。表3-3に示した受講時の不都合についてはインターネット環境に対する問題、資料・文献等の利用が困難であること、授業資料を印刷する際の費用的な負

表3-2 2020年度前期におけるオンライン授業の受講場所

環境 (複数選択可)	件数	割合
自宅 (家族・親族の家含む) の1人で受講できる部屋	1380	93.05%
自宅 (家族・親族の家含む) だが、周りに家族等がいる部屋	368	24.81%
	自宅	1748
情報実習室	74	4.99%
大学図書館	11	0.74%
大学構内 (情報実習室・図書館を除く)	15	1.01%
	大学	100
市立図書館	2	0.13%
喫茶店等の店舗	38	2.56%
友人・恋人の家	85	5.73%
先輩・後輩の家	4	0.27%
その他	15	1.01%
	その他	144
計	1992	

割合は回答者数 (1483名) に対しての計算

担を学生は問題として感じていることがわかる。また、上記の受講場所と重なり、集中できる環境がないと感じている学生も一定数おり、このような学生への支援が必要である。表3-4に示した非対面授業に対する不安などについては、課題の量・難易度についての項目、コミュニケーション関連の項目、学習時間と休息に関する項目などが選択されやすかった。課題の量の問題に次いで他者の様子がわからないことを訴える学生が多い。対面授業であれば同じ空間で学ぶ学生の様子や、共に課題等に取り組む姿を見ることができ

が、非対面授業では他の学生の状況を知ることが難しくなりやすい。COVID-19の影響による孤立感は低いことが示されているもの(飯田他, 2020)、授業という枠組みの中では他者との繋がりを感じにくいものと思われる。

一方で、非対面授業を受ける上での不安等について、「特になし」もしくは問題・不安の選択がなかった学生の割合は合計で18.88%となった。必ずしも全ての学生が問題・不安を抱えているわけではなく、大学の実施した支援や教員からの指導などは一定の効果が

表3-3 2020年度前期における自宅受講環境の問題

自宅環境の問題 (複数選択可)	件数	割合
インターネット環境が悪い	705	47.54%
自身が占有できるパソコンがない	89	6.00%
印刷ができない	404	27.24%
集中できる環境 (自室など) がない	229	15.44%
資料・文献等を入手できない	425	28.66%
その他 (特になし以外)	76	5.12%

割合は回答者数 (1483名) に対しての計算

表3-4 オンライン授業を受ける上での不安や問題

不安・問題 (複数選択可)	件数	割合
課題の量が多い	1001	67.50%
課題が難しい	476	32.10%
課題の提出期限がわからない	164	11.06%
課題の提出期限が短い	396	26.70%
取り組むべき課題がわからない	182	12.27%
通信環境・トラブルによる成績への影響	508	34.25%
他者の様子がわからない	675	45.52%
質問あるいは意見を言いにくい(チャット・メール等も含む)	444	29.94%
教員とコミュニケーションをとりにくい	598	40.32%
リラックスできない	206	13.89%
集中できない	465	31.36%
学習内容を理解しにくい	471	31.76%
学習時間に余裕がない	344	23.20%
授業時間が短い	32	2.16%
授業時間が長い	167	11.26%
その他 (特になし以外)	60	4.05%

割合は回答者数 (1483名) に対しての計算

あったものと考えられる。個別の授業改善に資する知見ではないものの、表3-1～3-4で得られた結果を元に、十分に議論を重ねることで大学全体の支援策の発展と改善に寄与できる。

3-2. 課題について

課題については表3-4でも示されたように、少なくとも COVID-19の影響下において、学生にとって懸念事項の一つであることに疑いはない。課題についての項目である平均的な課題への取り組み時間、課題の負担感を表3-5に示した。授業への負担感等と同じく、課題への負担感も履修科目の数に影響を受けることが予想されるため、授業についての項目と同じく、課題についての項目に対して履修科目の数を共変量とした共分散分析を行い学年の効果を分析した。その結果、課題にかける時間について学年の効果が見られた ($F(6, 1466) = 15.29, p < .001, \eta^2 = .04$)。Tukey の多重比較を行った結果、大学1～3年生と短大2年生は大学4年生に比べて課題に時間をかけていることが明らかになった ($ps < .05$)。課題への負担感についても学年の効果が見られた ($F(6, 1466) = 22.00, p < .001, \eta^2 = .01$)。Tukey の多重比較を行っ

た結果、大学1年生は大学3、4年生に比べて課題への負担を感じやすく、大学2、3年生と短大1、2年生は大学4年生に比べて課題への負担を感じやすいことが明らかになった ($ps < .05$)。これらの結果から、学生が1つの課題に対して約1時間～2時間程度の時間をかけているとすると、全ての科目で課題が課されるわけではないとしても、履修科目の多い1、2年生では授業時間外に学習する時間がある程度長くなるものと考えられる。これらの分析結果も履修科目数を統制した上での結果であるため、学年を経るに従い、課題への負担感は下がりやすい傾向にあることが伺える。授業への負担感と同じく、学年を経るごとに大学の授業に関する負担は相対的に減り、自身のキャリア発達や資格の勉強などの正課外の学習に力を入れるようになるためにこのような結果が得られたのかもしれない。授業についての負担感等と同様に、この結果が COVID-19や非対面授業の影響によるものかを検討するためにも対面授業との比較が望まれる。

3-3. 支援・相談等について

COVID-19による精神的な健康の問題が飯田他(2020)によって報告されている。

表3-5 課題についての項目の平均値および標準偏差

	大学					短期大学部	
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生以上	1年生	2年生
課題にかける時間	4.19 (1.24)	3.94 (1.24)	3.97 (1.26)	3.53 (1.48)	1.75 (1.38)	3.97 (1.20)	4.43 (1.43)
課題への負担感	5.68 (1.21)	5.55 (1.45)	5.23 (1.59)	4.21 (1.60)	4.71 (1.79)	5.43 (1.24)	5.49 (1.53)

注) 値は平均値, () 内は標準偏差

表3-6 支援・相談に関連する項目の平均値および標準偏差

	大学					短期大学部	
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生以上	1年生	2年生
学内友人の数	5.20 (7.46)	13.89 (14.89)	15.43 (20.39)	14.85 (16.93)	2.59 (2.83)	6.92 (6.92)	14.87 (11.9)
相談できる教職員の数	0.92 (1.50)	1.45 (1.85)	1.62 (2.99)	2.02 (2.22)	1.29 (1.26)	1.68 (1.55)	2.16 (1.97)
大学からのメールの数	2.90 (2.37)	2.87 (2.90)	2.38 (1.81)	1.47 (1.31)	2.59 (4.54)	2.37 (1.63)	2.68 (3.83)

注) 値は平均値, () 内は標準偏差

COVID-19の影響下にある大学教育にとって、学生の支援を充実させることは急務である。本項では学生の得られる支援策等について検討するために、支援や相談等に関連する調査結果を報告する。

まず、学内の友人数、相談できる教職員数、大学からのメール数の平均値と標準偏差を表3-6にまとめた。学年による違いを検討するために、学年を独立変数とし、支援・相談等に関わる項目を従属変数とした分散分析を行った。その結果、友人数について学年の効果が見られた ($F(6, 1467) = 22.33, p < .001, \eta^2 = .08$)。Tukeyの多重比較を行った結果、大学1年生と短大1年生はそれ以外の学年よりも友人数が少ないことが示された ($ps < .05$)。相談できる教職員数について学年の効果が見られた ($F(6, 1467) = 8.08, p < .001, \eta^2 = .03$)。Tukeyの多重比較を行った結果、大学1年生は大学2～4年生および短大2年生に比べて相談できる教職員数が少なく、大学2年生は大学4年生よりも相談できる教職員数が少ないことが示された ($ps < .05$)。大学からのメール数について学年の効果が見られた ($F(6, 1467) = 12.70, p < .001, \eta^2 = .05$)。Tukeyの多重比較を行った結果、大学1年生は大学2～4年生および短大2年生に比べて相談できる教職員数が少なく、大学2年生は大学4年生よりも相談できる教職員数が少ないことが示された ($ps < .05$)。

次に、困った時に相談する相手について、表3-7に示した。COVID-19下の非対面授業においても、困った時には多くの学生が友人に相談することが示された。また、本調査では授業に限定して質問したためか、教員に相談する学生の割合も35.40%であった。相談しない学生の割合は12%であった。

以上の結果から、学生の多くは困った時には友人・恋人に相談するものの、1年生はまだ学内に友人が少ないことから、その機会を十分にとれない可能性があることが示唆され

表3-7 困った時に相談する相手

相談する相手	件数	割合
教員	525	35.40%
遠隔授業サポートチーム	128	8.63%
大学職員	77	5.19%
家族	373	25.15%
友人・恋人	1082	72.96%
先輩・後輩	148	9.98%
相談しない	178	12.00%
その他	8	0.54%

割合は回答者数(1483名)に対する計算

た。また、友人・恋人に次いで相談できる相手として教職員の存在があるものの、下級生は相談できる教職員を見つけにくいという現状も明らかになった。大学からの支援や授業の情報などはメールで届くことも多いが、これは4年生を除いてほとんどその量に差がないことがわかった。これらの項目はいずれも標準偏差が大きく、それぞれの学生によって置かれている状況などが大きく異なることも予想される。特に相談できる教員・職員の存在を増やすことで、安定した支援に繋がられるのではないだろうか。

4. 教員一斉調査の結果と考察

以下に教員への調査結果を示した。

4-1. 授業について

対面授業と比べた授業準備の時間、今後も非対面授業を続けたいか、今後もLMSを活用したいか、時間外学習の想定時間について、平均値と標準偏差を表4-1に示した。

表4-1 授業についての項目の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
授業準備の時間	6.08	1.10
非対面授業を続けたいか	4.21	1.92
今後もLMSを活用したいか	5.31	1.86
時間外学習の想定時間	3.19	1.10

この結果から、授業準備の時間は平均的にみれば対面授業時と比べて増加していることが伺える。過去に例のない非対面授業を維持するために、各教員の努力が注がれていることが本調査からも示唆された。授業準備に多くの時間をとられた非対面授業であるが、これを継続したいかの問いは中間の値である4に近い数値となった。標準偏差が1.92と比較的大きく、この項目に関して言えば、非対面授業を継続したくない教員と継続したい教員の両者が混在していることが明らかになった。一方で非対面授業でも活用されたLMSについては、平均的に今後も活用していきたいという意思が見られる。LMSの活用は非対面授業の運営だけでなく、これを機に対面授業の向上にも活用されていくかもしれない。時間外学習の想定時間については平均値が3.19であり、「3. 30分以上1時間未満」程度であることがわかる。学生の全体平均が3.68であることから、教員が想定した課題にかける時間よりも、実際の学生が課題にかける時間は少し長くなる傾向にあることが本調査から推測することができる。

4-2. 学生の様子について

対面授業と比べた学生の質問等の量、対面授業と比べた学生の質問等に対応する時間、対面授業と比べた学生とのコミュニケーションの時間、対面授業と比べた学生の授業理解、対面授業と比べた学生の課題提出状況について、平均値と標準偏差を表4-2に示した。また、学生の受講態度等、学生からの質問等の種類について表4-3、表4-4にまとめた。

表4-2の結果から、学生からの質問の量・時間共に、平均的にはやや増えていることが伺える。しかし、学生とのコミュニケーションについては中間の値である4を下回っており、非対面授業によって学生とのコミュニケーションが少なくなっていることを教員が感じていることが明らかになった。

表4-2 学生との関わり・学生の様子についての平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
質問等の量	4.65	1.38
質問等に対応する時間	4.94	1.62
学生とのコミュニケーション	3.61	1.64
授業内容の理解	4.25	1.20
課題提出状況	4.94	1.46

また、学生の様子については、表4-3に示したように、非対面授業によって欠席する学生が対面授業より減ったと感じている教員が比較的多い(41.94%)ことが明らかになった。オンラインを使った非対面授業では大学外、たとえば自宅などからでも柔軟に受講できる。これにより、例年よりも学生の出席に対する抵抗が小さくなったと考えられる。金子・永井(2020)によれば、学生は授業への出欠に対して通信トラブルなどの影響を懸念している様子が記述されている。教員側からの視点では出席の有無のみを確認しがちであるが、その過程において出欠に関するトラブルや不安を学生が抱え、それが学生の負担となっている可能性もある。オンラインの活用により学生が出席しやすくなると、本調査の結果のみで結論付けることはできない。学生の出欠に次いで学生の受講態度についてもその他の項目に比べると選択される比率が高かった。対面に比べて受講態度が悪くなったと感じる教員は少なく(1.29%)、良くなったと感じる教員がそれと比較して多い(27.10%)。ただし、受講態度が良い学生・悪い学生の二極化を感じる教員もいる(22.58%)。表4-2に示したように、非対面授業下では教員も学生とのコミュニケーションをとりにくい。そのため、学生の受講態度についても対面よりも少ない情報の中での把握となる。その中ではより目立つ学生に注意が集まり、その結果学生の受講態度が二極化していると感じやすいのかもしれない。2020年度前期については、教員から見た学生の受講態度が良

かったことについて、一定の評価はすべきである。今後も非対面授業における教員と学生とのコミュニケーションや学習態度の評価・指導についての議論はさらに必要とされる。

学生からの質問等の内容は、やはり授業内容に関するものが多いものの、Zoom や LMS などのシステムに関するものも比較的多い。金子・永井 (2020) にあるように、北星学園大学では遠隔授業サポートチームを立ち上げていたが、学生が実際に頼るのは科目担当教員となりやすいことが本調査から伺える。非対面授業になることで、学生の欠席が減少し、課題の提出状況も肯定的に評価されているが、非対面授業であることによる授業内容の理解の促進にまでは至っていない (表4-2) ようである。

5. まとめ

COVID-19の影響下にあり、北星学園大学

をはじめ多くの大学では急遽非対面での授業を実施することになった。そのような状況下においては、学生・教員のいずれも大学教育の維持に例年以上の労力を必要としたものと思われる。そこで、本研究では非対面授業に対する学生・教員の様態を報告することを目的とした。

その結果、学生の負担感や相談相手などの関係性については、学年によって差があることが示された。特に1年生は負担を感じやすく、学内の友人や教職員との関係も形成しにくい。本調査は2020年度前期という1時点のみの調査であるため、本調査の結果がCOVID-19および非対面授業の実施によるものなのか、あるいは例年と変わらない結果なのかは分からない。しかし、少なくとも非対面授業を中心とした2020年度前期の1年生は他の学年よりも負担を感じやすいことが明らかになったため、今後も特に下級生への支援策が必要とされる。また、2021年度以降も、

表4-3 非対面授業下における学生の様子・状況

相談する相手	件数	割合
対面に比べて受講態度が良くなった	42	27.10%
対面に比べて受講態度が悪くなった	2	1.29%
受講態度が良い学生・悪い学生の2極化した	35	22.58%
欠席する学生が減った	65	41.94%
欠席する学生が増えた	7	4.52%
不正を試みる学生が減った	2	1.29%
不正を試みる学生が増えた	7	4.52%
その他	60	38.71%

割合は回答者数 (155名) に対しての計算

表4-4 非対面授業下における学生からの質問内容等

質問や問い合わせの例	件数	割合
授業内容に関するもの	115	74.19%
Zoom や Moodle などのシステムに関するもの	89	57.42%
大学の履修や単位・成績に関するもの	38	24.52%
学生生活に関するもの	15	9.68%
その他	21	13.55%

割合は回答者数 (155名) に対しての計算

非対面授業が継続される場合には、引き続き学生の様態を注意深く観察し、積極的な議論を必要とする。

同時に教員の負担等も念頭におかなければならない。本研究の結果からも教員の負担が対面授業に比べて多く感じられやすいものの、負担の増加に比して学生への教育成果には結びついていないようである。本研究からは慣れない非対面授業への適応に教員の労力が割かれ、学生がより授業内容を理解できるようになるという点での ICT の積極的な活用に至ったわけではないことが示唆された。これは COVID-19 への対応を考えれば妥当な結果であり、2021年度以降の教育や授業運営に向けて改善していくことが望まれる。そのためには非対面授業の特徴や2020年度の状態について広く共有し、批判的に検討していくことが求められる。

今後の課題として、非対面授業の導入・整備や ICT 活用のためには、より焦点を絞った検証的な研究が求められる。授業の内容や形態など様々な要因によっても非対面授業の在り方は異なると考えられる。これらを整理した上で、多様な教員・学生に対して ICT の活用がもたらす学習・教育効果を検討することで、より充実した高等教育の発展に寄与できる。

【謝辞】

本研究のデータは北星学園大学遠隔授業サポートチームから提供を受けた。調査協力を得た学生・教員に謝意を表す。

【引用文献】

藤本 淳也・福田 一儀・鳥山 稔・松永 敬子・江原 謙介 (2020)。「学生生活への新型コロナウイルス感染症拡大の影響に関する調査」結果 (完成版) 大学スポーツコンソーシアム KANSAI, Retrieved from <https://www.kcaa-jp.org/post/20200413> (2020年11月2日)

飯田 昭人・水野 君平・入江 智也・西村 貴之・川崎 直樹・斉藤 美香 (2020)。「新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響に関する調査結果 (速報版) 北翔大学, Retrieved from <https://www.hokusho-u.ac.jp/info/?i=2389> (2020年10月30日)

永井 暁行・中村 和彦 (2020)。「主体的な学修態度と協調性の関連—交差遅延効果モデルによる検討— CAMPUS HEALTH, 57 (2), 169-176.

永井 暁行・金子 大輔 (2020)。「自宅・自室での学習環境に関する緊急調査」に対する計量テキスト分析 北星学園大学文学部北星論集, 58 (1), 43-49.

金子 大輔・永井 暁行 (2020)。「北星学園大学における非対面授業に対する支援態勢の構築と学生の意識変化」教育システム情報学会誌, 37 (4), 286-296.

